

◆平成 29 年度 第 5 回（通算第 66 回）蔵前ゼミ 印象記◆

日時：2017 年 10 月 13 日（金）

場所：すずかけ台 J234 講義室

疑問を持つこと、現場を見ること

= 科学ジャーナリズムの経験から =

佐藤 年緒（1975 社工）環境・科学ジャーナリスト，元 時事通信編集委員

講師の佐藤さんは、世界が大きく変わろうとしている時に高校時代を過ごした。今から約 50 年前だ。ベトナム戦争（1964～1975）が泥沼化し、中国では文化大革命（1966～1976）の嵐が吹き荒れ、国内では公害問題や大学紛争が新聞の一面をにぎわせていた。実際、受験の年には、大学紛争の影響で東大の入学試験が中止になった（1969）。このような時代背景もあって、“社会”に興味を持ち始めていた佐藤さんは本学の「社会工学科」を目指して 6 類に入学し、2 年次では希望通り社会工学科に所属した。熱心に勉強し、3 年次までに、卒業に必要な単位をすべて取り、残すは卒業研究のみだったが、ここで 1 年間休学し社会勉強をすることにした。不思議に思って理由を聞いてみると、人文系の先生方（社会思想史の判沢弘，1919～1987；政治学の永井陽之助，1924～2008）や元教授（文化人類学の川喜田二郎，1920～2009）から大きな刺激を受けたが、肝心の「社会工学とは何か？」が自分の中で見えてこない上に、社会工学科に所属しながら実社会のことを何も知らないことに気づいたからだとのことだった。

そんなわけで、佐藤さんは 1 年近く技術系のコンサルティング会社でアルバイト（注1）をし、その年度末の 3 月に 3 週間かけて東南アジア（香港・タイ・マレーシア・インドネシア・ベトナム）を足で体験するツアーに参加した。多くのことを学び視野が広がった。この時の体験を友人たちに報告した際に「佐藤はレポートがうまい」と褒められたことが新聞記者を目指す 1 つのきっかけになったようだ。筆を執ることが苦にならない佐藤さんを羨ましく思った人も多かったに違いない。

佐藤さんを休学へと追いやった言葉が“Interdisciplinary”だったのではないかと推測した。「社会工学とは Interdisciplinary（学際的な学問だ）」といって何となくわかった気分になり、

本質的な議論に踏み込まないで満足しがちだが、突き詰めて考えると確かに佐藤さんが言うように「学際的な学問といっても、その基盤となっているもの（学問）があるはずで、それは何？」となる。結果的に佐藤さんの休学は正解だったが、Interdisciplinary のような漠然としていて実態がつかみにくい言葉は、ややもすると人を理解した気持ちにさせ、さらなる思考を停止させるゆえ要注意だ。私たちは往々にして、質問に対する答えに窮した時には、難しい（少しかっこいい）言葉で切り抜けようとするが、これは NG なのだ。

佐藤さんは、時事通信の記者や編集者を経て、52 歳からはフリーのライターとして活躍するかたわら、科学技術振興機構（JST）が取り組もうとしていた「理科離れ対策」の 1 つとして、次世代を担う人たちに最も影響力のある小学校の先生（理科を苦手とする人が多い）向けのユニークな科学教育雑誌「Science Window」の創刊に関わり、長く編集長（2006～2016）を務めた。この間に、早大（2005～2007）・東大（2012～2015）等で「科学技術ライティング」の授業も担当した。これらの経験に基づいて、「科学記者の心得 10 ヶ条」を教えてもらったが、その第 1 条が「まずは現場を大事に」だった。文筆業で生計を立てている人でも、『疑問を持つこと、現場を見ること』が基本だそうだから、ましてや私たちは言葉の魔法使いになる必要はさらさらなさそうだ。格好いい表現や難解な単語をちりばめるのは、かえってマイナスらしい。「取材がしっかりしていて、書き手の理解が深くないと読者の心をつかむのは無理だ」というのは納得だった。

最近、次のような記事（注2）を読んだので、関連の話題として記しておこう。転職の最終段階での社長面接の 1 場面だ。入社希望の A さんは次のような質問をした：「このビジネスのポートフォリオは

どのように組み立てられているのでしょうか？」。すると社長は「何ですか、そのポートフォリオというのは？」と聞き返した。この社長からの予想外のツッコミにAさんは動揺し、ポートフォリオをうまく説明できず、その場の雰囲気が気まづくなったようだ。Aさんは転職がうまくいけば自分が担当することになるプロジェクトが社内でのどの程度重要視されているのかを知りたかっただけだし、社長とすれば、佐藤さんの10ヶ条でいえば第2条にあたる「知らないということを恥じない」を実践しただけだが、Aさんがポートフォリオ^(注3)という流行語を使ったために、社長の信頼^{えそこ}を得損ない、残念な結果になってしまったのだ。

「言葉は世につれ、世は言葉につれ」ゆえ、流行語には敏感でなければならない。例えば、「インターナショナル (International)」と言っていた時の国際化の波は、さざ波程度だったが、「グローバル (Global)」という言葉が登場し定着すると驚くほどの速さで国際化が進行した。“International”よりは“Global”の方が人を動かす力が圧倒的に強いからで、「世は言葉につれ」の典型例だろう。しかし、ポートフォリオのような難解な言葉にはその力が欠けている。勝負所では易しい言葉を使うように心がけよう。

◆今回のゼミでは、^{みずか}演者の佐藤さん自らが講演録を作ってくださったので、この印象記の本題部分はその引用で代えさせていただく(次頁以降)。文筆業^{なりわい}を生業とする人の心得10カ条は職種を問わず参考になるに違いない。私たちへのメッセージでは、(1)自分の感動 (Sense of wonder) からくる“伝えたいという思い”が根底にないと、相手の心をつかめないことや、(2)本学教授だった川喜田二郎^(注4)が提唱した「KJ法」や「W型問題解決法」によって問題の核心に迫り、誰にでもわかる形に整理した上で、やさしく表現することなどの大切さが語られた。パネルディスカッションの「夢を追う」では、(i)『夢想家を笑うな』^(注5)という新聞記事の紹介や(ii) 口に出して言うと夢は実現するものだという勧めがあった。後者に関して言えば、

聞いた人の誰かが応援してくれるからだそうだ。それに、人は鏡を見て自分の身だしなみや健康をチェックするように、自分の能力を評価する鏡が必要だ。その鏡の役割を果たしてくれるのが周囲の人たちゆえ、言葉にしないと鏡は機能しない(助言が得られない)ことになる。夢(目標)に向かって進もうとしている人には、「実験が上手だね」「センスがいいね」「君ならできるよ」「まかせたよ」といった一言が何よりも心強いはずだ。この“佐藤の鏡”を磨けば、「そんな事できるはずがない」の罵声をも闘志の点火材に変えてくれるはずだ。

^(注1) 今はやりのインターンシップの先駆けと言えそうだ。

^(注2) 森本千賀子、「それ言っちゃダメ！ 転職の面接、致命的な5つの失言」、出世ナビ—次世代リーダーの転職学、NIKKEI STYLE, 日本経済新聞, 2017/10/27。

^(注3) Portfolio: 作品・資産・活動などの一覧。【活動の結果をひとまとめにしたもの】が原義だが、そこからは企業の事業全体に占める各事業の割合も見て取れるので、経営資源の最適配分に利用できる。

^(注4) 川喜田二郎: 平成21年度第4回(通算第9回) 蔵前ゼミ印象記参照(2009.7.17)。川喜田さんは大学紛争がらみで1969年に本学を辞めているので、佐藤さんの入学とは入れ違いになっている。1966年入学の私(広瀬)は川喜田さんの講義を受けた。当時、氏名のローマ字書き(英語表記)はJiro Kawakitaとするのが一般的だったが、川喜田さんは比較文化人類学の立場から異を唱えていた。その表れがJK法ではなくKJ(Kawakita Jiro)法という呼称だ。特定の民族の言語(英語)を国際標準語にすると、その民族は途方もない恩恵をこうむり、競争原理が成り立たなくなるので、新しい言語(エスペラント語)を導入すべきだと主張していた。英語圏の人たちはグローバル化の時代に圧倒的に有利な条件を手に入れていることを忘れがちのようだ。人工知能と周辺に関連技術が進歩し、瞬時に同時通訳ができるようになる日が待たれる。

^(注5) 小倉孝保、「ノーベル賞：“ICAN”に平和賞—夢想家を笑うな」、毎日新聞2017年10月7日